世界遺産都市ポンペイと「おおさか」のまちづくり

實　　清　隆*

Management of the City of Naniwa, Osaka with Reference to Pompeii

Kiyotaka JITSU

要　旨

ポンペイはイタリアの南部ナポリの南 20 km にある地方都市であった。この都市は、BC 6 世紀頃、ギリシャの植民都市として発生し、BC 89 年にローマによって征服され、ギリシャとローマの文化を兼ね具えた古代都市である。ポンペイはギリシャの直接民主制、演劇、絵画・彫刻、音楽、スポーツ、教育・哲学と合わせて、ローマの優れたインフラ（上・下水道、道路、建築）技術、豊かな食生活、ローマ風呂、エキサイティングな闘技場などを具え、都市生活の面からみると、「桃源郷」ともいえる様相を呈した古代都市である。

AD 79 年にヴェスビオス火山の爆発で埋没した。17 世紀を経て、タイムカプセルとして発掘されたこの町は、現在の都市論、とりわけ、都市行政・まちづくりを考察するうえで、大きな示唆・ヒントを提供している。茲に、当論文では、そのポンペイを「都市経営」という視角に重点を置いて分析したうえで、ポンペイの町づくりのセンスと酷似している「なにわ・おおさか」のまちづくり論を展開する。

【キーワード】ポンペイ、大坂、大阪、まちづくり

Ⅰ　ポンペイのまちづくり

(1) ポンペイの社会構造

ポンペイは BC 600 年ごろギリシャ人の植民都市として成立した。そこには古代イタリア人であるオスキ人が住み、都市の経営のイニシアチブはギリシァ人が執ったが、市民の大半はオスキ人であった。BC 3 世紀頃から次第にローマの勢力がイタリア半島南部にも拡張し、BC 89 年にはローマの将軍スルラに攻められ、ポンペイは陥落する。以後、ポンペイはローマの保養都市として発展した。現在のポンペイの南西部（ほぼ 300 m 四方）がギリシャ時代の領域であったが、以後、6 倍ほどに拡張された（図 1）。

町の公共広場たる「フォールム」はギリシャ時代の「アゴラ」にあたり、旧市街のほぼ中央部に存在する。噴火当時のポンペイの人口は 2 万人程度と推測されている。人口の内訳は、奴隷階級（農・商工業の労働者）が 32%、在留外人（メトイコイ・おもに商工業に従事）が 7%、自由民（農地の所有者）が 61% で、そのうち、市議会への参政権を持つ自由民は成人男子で、人口

平成 29 年 9 月 12 日受理　*奈良大学名誉教授

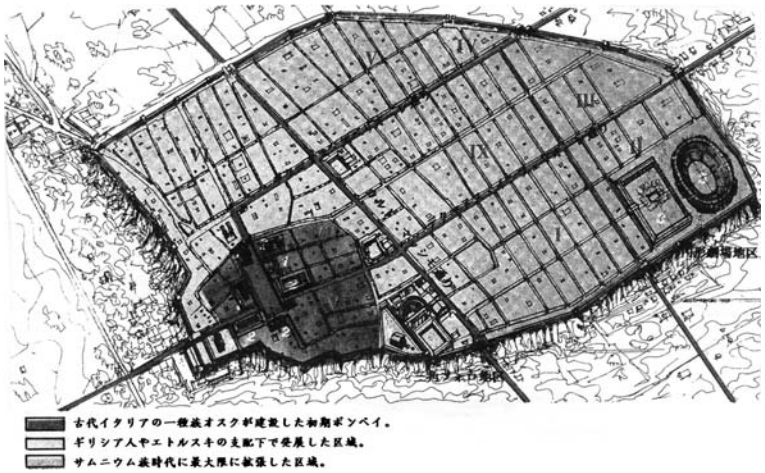


図 1　ポンペイのプラン
アルベルト　カカルピチューチ『ポンペイ』Benechi Edizion Turism より転写

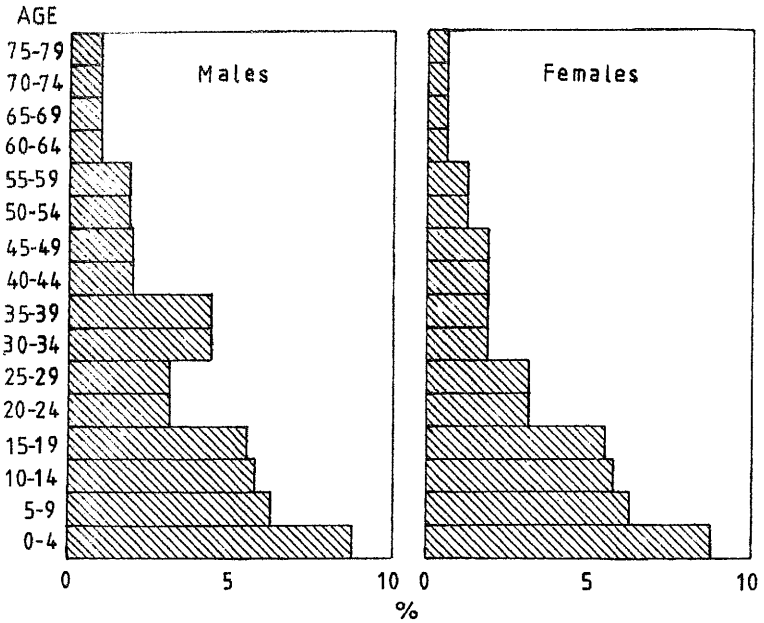


図 2　ポンペイの人口構成（噴火時の犠牲者より）
R. J リング（堀賀訳）『ポンペイの歴史と社会』より転写

の 20%（4000 人）程度で、政治体制としてはギリシャ以来の「直接民主制」が採られた。

社会体制的には、奴隷制に立脚していたとはいえ、有能な奴隷には、主人から「報酬」が支払われており、自分の売値の 5% を支払えば「解放奴隷」となり、「自由民」の地位が買えた。事実、奴隷階級からニ人官（市長格）まで上り詰めたものも少なくない[1)]。このように階級間の争い・人種間の差別は殆どなく、女性も夫に服従するだけでなく、広場の雑踏に出かけたり、商店を経営したり、祭りにも参加するなど社会的には男性とほぼ、同じ立場が保障されていた。

ポンペイの人口構成を発掘された遺体からの推測では、①年齢別人口構成からみると、医療技術のレベルもあり、年齢別人口構成はピラミッド型の「途上国型」であった。平均死亡年齢は男子 41 歳、女子 39 歳と推測されている。②人種構成では、圧倒的にヨーロッパ系であるが、アフリカ系も見つかっている（図 2）[2)]。

（2）ポンペイの都市構造・都市生活

ポンペイは東西 1200 m、南北 700 m の楕円形に近い外壁をもった都市である。市の西南部に「フォールム」がある。その周辺にバシリカ（取引場、裁判所）、行政府（投票所・議場・市財務局）、羊毛取引場・貨幣交換所・神殿（アポロン・ジュピター・ウェスパシアヌスなど）が取り囲んでいる。

フォールムは都市行政にとってきわめて大きい役割を果たした。この場では市民が集まり「政」が行われ、市の行政を執行する「市民自治」実現の場であった。この都市の「広場」が、中世ヨーロッパの都市には「市場広場」（Marktplatz）となり、広場に面して市庁舎（Rathaus）が具わっており、広場では市も開かれた。将に、広場は「市民自治」が沁みこんだ公共空間として継がれていった。

近代になると都市の人口規模が増大し、都市行政は「議会制」に移るが、この市民自治のセンスは脈々と引き継がれており、現在でも、イタリアの都市には「地区評議会」（Consiglio di Quatiere：日本の町内会よりやや大きく、直接住民が行政に参加できる。財政力もあり、各種の行事も決定し運営される）があり、そこに「住民」がこぞって参加しており、ギリシャ以来の市民自治の精神が遺憾なく発揮されている。

市街地は歩車道分離のヒッポダモス方式の歩車道分離の碁盤目状の道路が広がっている。（放射状の街路であると住む位置によって格差が生じやすい）歩道は車道に比べ十数センチ高くなっており、通りは雨水の下水の役割も兼ねている。街路には置き石が設置され、歩車道（家畜による運搬車）の分離が徹底している（図 3）。

ポンペイの市民の生活は、原則的には、午前中は仕事をし、午後はゆっくりと食事をとり、ローマ風呂へ向かう。時には、劇場、パレストラ（体育場）、居酒屋、アンフィシアター（闘技場）などに赴き、そこで、人間を取り戻し、ゆとろぎ（ゆとり・くつろぎ）の時間を過ごしている。以下、ポンペイ市民の集う場所を挙げる。

①ローマ風呂

ローマ風呂はポンペイの市民がもっとも親しみをもって過ごすところ。入湯料もただ同然の 2.5 円で、市民全体が集まる。風呂には冷湯、温湯のほか熱浴（サウナ）がある。ここには、プール、図書館も備わっ

図 3　ポンペイの市街
著者撮影

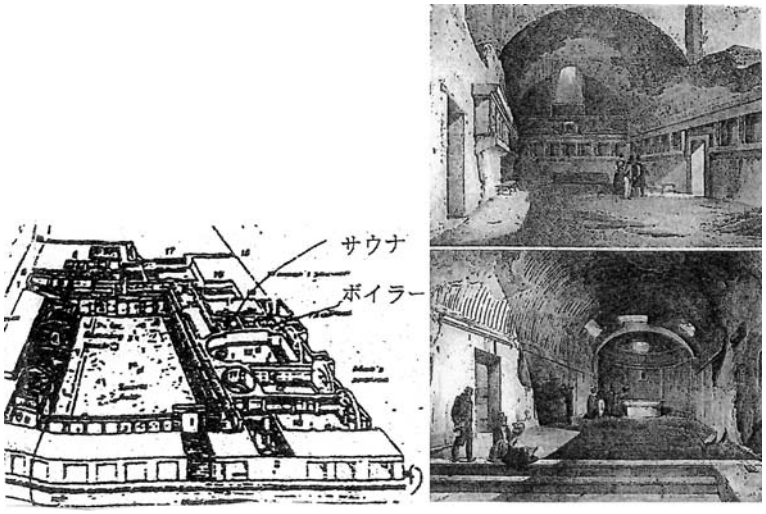


図 4　ローマ風呂
ロベール　エティエンヌ（弓削訳）『ポンペイ奇跡の町』より転写

ている。さらに、各種の体育施設があり、重量挙げのようなフィットネスもできたし、毛抜きや香水のサービスも行われていた。市民が大勢集まり、その騒々しさは大変なものであったという。恋を語るもの、唸り声・・、まさにここは市民ふれあいの場であった（図 4）。

②劇場

市民にとって演劇は「心を癒し、明日への生きがいを創造する」場でもあった。5000 人収容の大演劇と、1300 人収容の小劇場がある。大劇場では喜劇・悲劇・風刺劇が演じられた。その中でも、庶民には、風俗喜劇、笑劇に人気が集まった。姦通物や占い師・陶工・絵描きなどを揶揄した風刺喜劇は大受けしていた。また劇以外に、音楽も人気があった。オーケストラ（すでにバイオリン、シンバル、フルートなど管楽器も揃っていた）の演奏やパントマイム（無言劇）も演じられ、それぞれ人気を博していた。重要なのは劇を演じたのはプロだけでなく市民も大勢加わっていたことである。小劇場（Odeon）は「通」の市民が楽しんだ。「冠と仮面」の詩の朗読など人気を博していた。市民はこのように、演劇・音楽を演じ、鑑賞し、そこに感動と心の癒しを求めていた（図 5）。

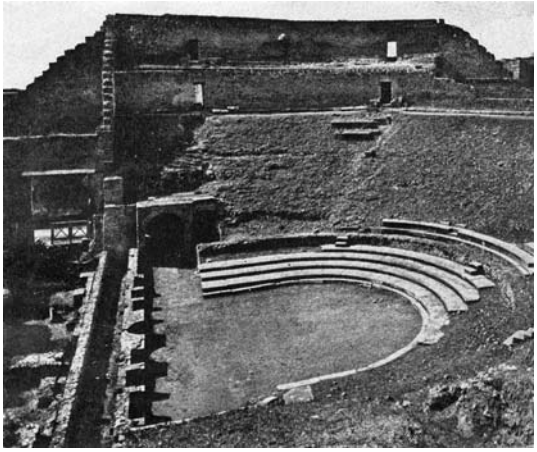


図 5　大劇場
岩波写真文庫『死都ポンペイ』より転写

③賭け・酒

賭けごとは結構、市民の間で人気があり、とりわけ、サイコロ、闘鶏は人気があった。酒は、

地中海は葡萄の一大産地であり、ワインが中心で、値段も安く愛飲された。ヘドネという売春宿もあった。娼婦達は奴隷で食事も粗末なものであったという。

④アンフィシアター（円形闘技場・Amphitheater）

町の南東部にある 2 万人収容のアンフィシアターでは、剣士（グレイディエーター）同士の果し合い、人対野獣、猛獣対家禽（ライオン対ガゼル）の一騎打ちなど市民が最も興奮する催し物がおこなわれた。興行主は金持ちの有力者であった。春から秋にかけて数日間、1 日に 6～8 試合行われた。剣士同士の試合は都市対抗の試合形式であった。ある時、試合中に不祥事が起き、ホーム側（ポンペイ市）とアウェイ側（ヌケリア市）の観客同士が大乱闘になり、アウェイ側の観客に多数の死者が出たことにより、ネロ皇帝から 10 年間の興行中止の命が下されたことがある（図 6）[2)]。

この競技場の隣にパレストラと呼ばれる体育場がある。ポンペイ人は演劇と同様にスポーツが大いに好み、ここで競技のトレーニングを行った。陸上競技では円盤投げ・幅跳び、ウェートリフティング、レスリング、鎧を被った騎馬団競争などに人気があった。ポンペイでは体力・競技力に優れた者が尊敬を集めていた。

⑤住居

家は石材で、その隙間を砂利と石灰で結び付けてコンクリートとして強力に結合させ、耐久性を高めている[3)]。ヴェスビオスの火山の大爆発・地震にも耐え、倒壊することなく、今日に至るまで型を保った優れものである（図 7）。

玄関には太陽の光を取りいれるアトリウムがあり、それを囲むように談話室・居間・寝室が設けられた。奥の間の中央には庭園（中庭）があり、水を引き入れ、糸杉・夾竹桃・月桂樹などの草花・樹木が植えられており、市民は自然を取り入

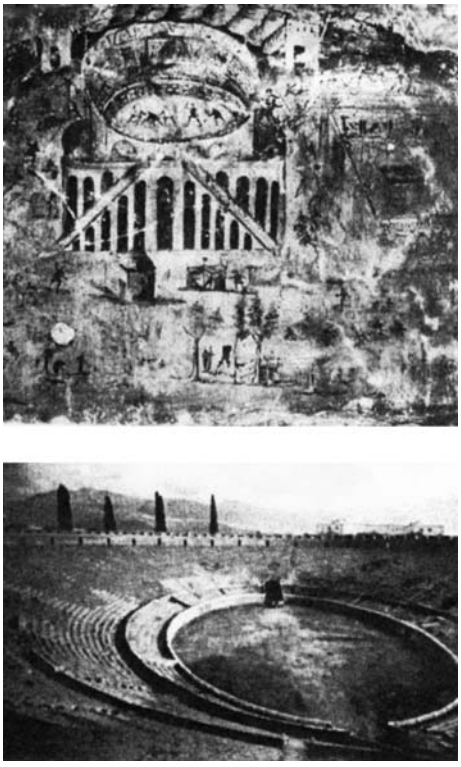


図 6　アンフィシアター
金子史朗『ポンペイの滅んだ日』より転写

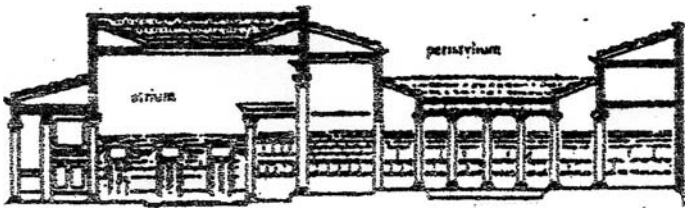


図 7　ポンペイの住宅
ロベール　エティエンヌ（弓削訳）『ポンペイ奇跡の町』より転写

図 8　絵画（愛）
ロベール　エティエンヌ（弓削訳）『ポンペイ奇跡の町』より転写

図 9　絵画（死）
ロベール　エティエンヌ（弓削訳）『ポンペイ奇跡の町』より転写

れ、ガーデニングを愉しんでいた[1)]。

玄関を入るとその壁面には様々な絵画・彫刻が飾られ、さながら小ギャラリーのようである。家の中に空想の美術館を造っていた。絵画のなかには神々のほか、愛や性豪、性交などエロティックな絵も多い。「生きていることは恋すること」。守護神の中でも美の守護神たるビーナスが絶大な人気を得ていた。市民は官能とモラルの調和（淫猥・堕落は非難される）を尊重した。また、絵画には、「どくろ」の絵もある。これらの絵画は通じて、人生の「感動のたる」瞬時、愛し合い（相聞）、死（挽）を表現している（図 8・9）[4)]。

⑥グルメ

ポンペイは周りが地中海に面し、広く海外との交易も活発に行われており、その食事は豪華のものであった。ワインは地元の特産でもあり、安く（高級ワインで 40 円）、パン、チーズの常食のほか、宴会では牛肉・豚肉・駱駝肉・キリンの肉・野兎肉、雌豚の子宮・猪の丸焼などの肉類、卵黄・小鳥の卵、カキ・ホタテ・伊勢海老・ウニ・の魚介類、リンゴ・ナシ・オリーブの木の実などの果実、更にはインドネシア産の香辛料など豪勢なメニューが並んだ。

このように、市民は、エキサイティングな演劇・格闘技の観戦、・絶品のグルメ料理、リラックスできる入湯など、ポンペイは「感動」「人間回復」に満ち溢れた都市民の桃源郷でもあった。この古代都市・ポンペイの叡智を我々現在の「まちづくり」に活かしたい。

町づくりに大切なのはコミュニティの連帯とコンセンサス。このポンペイ論を踏まえ、「なにわ・おおさか」の街づくりを論じる。

Ⅱ　なにわ・おおさかのまちづくり

1）なにわの古代から豊臣まで

「なにわ」に都市が成立したのは、645 年、孝徳天皇の御代に、上町台地の北端部に難波豊碕宮が建設されたことにはじまる。これ以前の 5 世紀には、仁徳天皇の高津宮があったとされてい

るが実証されていない。しかし、難波豊碕宮は存続期間が僅か10年足らずと短く、654年には明日香へ都が移されている。奈良に遷都された後も、その周辺が交易の場所的利点から副首都・外港都市として平安時代初期まで繁栄した。その後は淀川や「沿岸」流などの土砂の堆積があり、港としての機能が弱まり、経済都市としての役割は衰えてしまい、以後、「なにわ」の都は歴史の大舞台から退く。

再び「なにわ」が歴史の舞台登場してくるのが1492年。浄土真宗・蓮如上人はこの「難波豊碕宮」の立地した場所が、防御・商としての「場」として極めて優れていることから、ここに楽市・楽座の寺内町・石山本願寺を築いた。織田信長も天下奪取のあと、ここを「都」にと考え、石山本願寺と合戦、勝利するも、石山本願寺が焼失し、ほどなく信長自身も本能寺で光秀により殺害された。その後、豊臣秀吉が天下を取り、1593年に石山本願寺の跡地に大阪城を築城した。

秀吉のまちづくりは、城下を囲む惣溝（外堀の外に大川・猫間川・空堀・東横堀川で囲む）をつくり、その中に武士を集め、その南側と西側に「町」を創った。南側は空堀から四天王寺まで、平野郷から有力な町人を集め平野町をつくった。町の外側には寺（いざという時の出城）を配置した。西側の東横堀川から御堂までの「船場」にも町人町を築いた。また、秀吉は堺の環濠を埋め立て、豪商たちを強制的に「船場」（現在の堺筋付近）に移住させた。大阪城を完成させたあと、朝鮮半島へ兵を派遣している。狙いは、明をも攻略して世界制覇をも目論んだものであった。

秀吉の町づくりは、大阪城の周辺に総構（大川・猫間川・空堀・東横堀）をつくり、その南側に、寺（出城）を配した平野町、西側に船場町を創った。「船場」には背割の下水道まで配している。この「街づくり」と朝鮮遠征の莫大な費用の調達のために、大公検地・刀狩の実施を行ったり、堺や平野郷などの豪商人の富を吸い上げた。秀吉も朝鮮出兵中にほどなく逝去した（図10）。

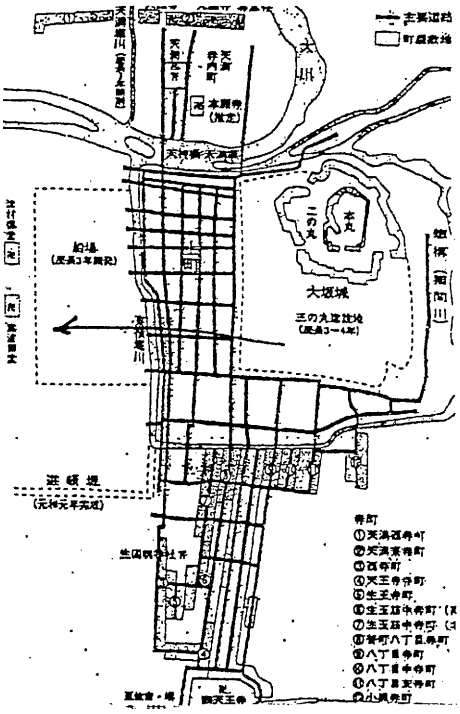


図10　豊臣秀吉のプラン
大阪市都市工学情報センター『大阪千年都市』より転写

2）江戸時代の大坂

秀吉が逝去したあと、1600年の関ヶ原の合戦で東軍・徳川家康が勝利を得、江戸幕府が始まる。1615年の大坂夏の陣で豊臣側の息の根が止められ、その後、幕府は、大坂の町づくりを松平忠明によって取り仕切らせる。大阪城を再建するとともに、大坂を日本の経済中心都市として活かした。松平忠明は、糸割商人など大坂の有力な商人たち焚きつけ、その金脈・人脈を巧みに街づくり事業に活用した。運河の掘削、川にかける橋は悉く町人の財力を活用している。あの「八百八

橋」もその殆どが町人橋である。運河の開削、弁財船による東・西回りの航路の開通により、大阪の繁栄が確固たるものになった。100 余もの蔵屋敷が建てられ、100 万石以上の米が搬入された。堂島には世界初の米の先物取引が行われた。天満の青物市、雑喉場の魚市が繁盛し、いよいよ大阪が天下の台所となった。「大阪の富は日本の 7 割、その富の 7 割が船上にあり」といわれ、水運の発達が大きな富を大坂にもたらした（図 11・12・13）。

大坂には武士は極めて少なく、その人口は僅か 2% に過ぎず、「町人」の町であった。大坂には天満組、北組、南組の 3 郷があり、奉行所の監督の下、各組では総代を頂点に町年寄・町代が取り仕切っていた。彼らは、「触書・口達の伝達」「地子・役銀の徴収」、「絵図帳簿の管理」・「訴訟の調停」・「清掃」などが主な仕事であった。なお、町の寄り合いには持家（町人）であることが条件であった。大坂の世帯の 84% は借家人であり、「町人」ではなかった。とはいえ、借家人の中にはかなりの分限者がいたが、彼らは公役・町役を嫌い、あえて「町人」になろうとしなかった。余計な見栄・外聞にこだわらなかった。このあたりが大阪人の反骨魂ともいえる。

この経済的な繁栄を背景として、大坂は上方文化が繁盛した。とりわけ元禄期での繁栄は顕著である。西鶴、この人物はまさに上方文化の原点にもなる人物で、その作品である『好色一代男』『日本永代蔵』『世間胸算用』などに大坂の町人・商人・武士の姿が生き生きと描かれている。作品には微妙に武士を「揶揄」しているところがあり、まさに町人の町・大坂を象徴している。この西鶴のネタが人形浄瑠璃・文楽の作者・近松門左衛門の作品にも多く採り入れられている。

文楽は竹本義太夫の語りが近松の作品とあいまって大ヒット、1684 年には道頓堀に劇場を開いた。その人気は絶大なものであった。近松は歌舞伎の台本も手掛け坂田藤十郎と組んで名作を多数出している。また、西鶴は、近松作品にも大きなヒントを与えているほか、もともと俳人でもあり、芭蕉への影響も大きかった。この元禄期の

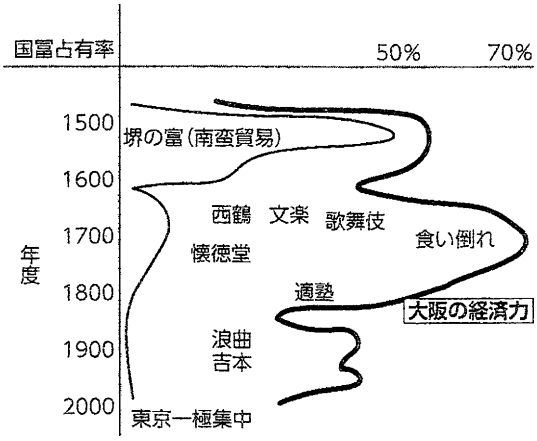


図 11　おおさかの経済力

著者作成

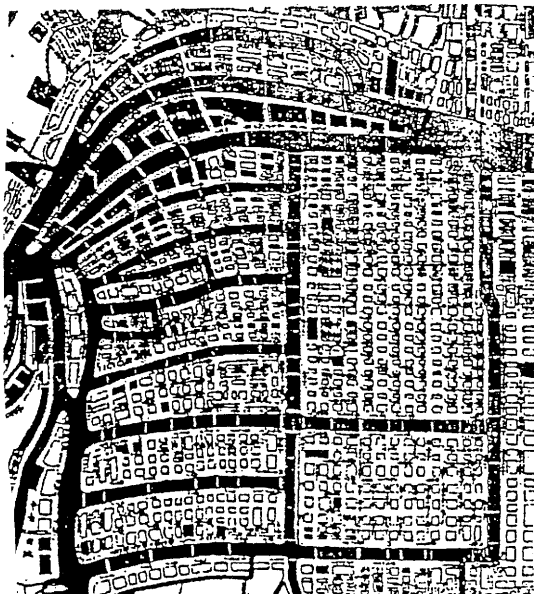


図 12　大阪の堀

著者所蔵図

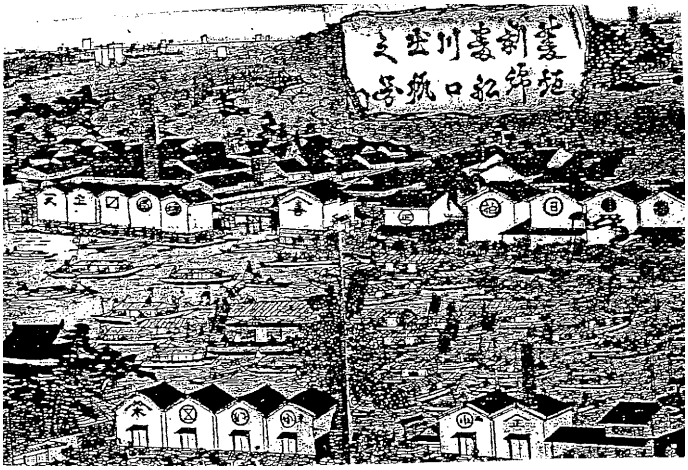


図 13　大坂蔵屋敷
大阪市都市工学情報センター『大阪千年都市』より転写

なにわの繁栄を背景に道頓堀界隈には 5 座（浪速・中・角・朝日・弁天）の芝居小屋も開かれ、新地に遊郭もつくられ、なにわの町民はどっぷりその文化を楽しんだ。

大阪には「食い倒れ」（グルメ）文化がある。大阪は天下の台所、全国から数々の食材が集積する。北海道から昆布（うまみの調味料）、土佐から鰹（カツオブシ）、大阪湾のカタクチイワシなどのおいしさを生みだす料理のエキス「出汁」の材料が集まった。その上、大坂近郊の新鮮な野菜（天王寺蕪・毛馬大根・高山ゴボウ・泉州玉葱・勝間ナンキンなど）・コメ（江州米など）が集められ、世界最高の食文化が創り出された。

この商業の繁栄を背景として多くの私塾・学問所が町人の力で開かれた。特に、含翠堂は 1717 年、老松堂という名で平野に開かれたのち、儒学者三宅関庵を招き含翠堂になった。1724 年、石庵と豪商が中心になって幕府公認の懐徳堂が創られた。ここから太陽系「大宇宙図」を描いた日本のニュートン・片山蟠桃、人体解剖学の中井履軒などがでている。1836 年に中天游が開いた適塾は、天然痘・コレラ予防の緒方洪庵、慶応義塾を立ち上げた福沢諭吉、橋本左内、大鳥圭介など幕末から明治初期にかけて、学問・思想・政治の各分野で数多くの人材を輩出しており、その学術的レベルの高さ、塾の数では江戸を遙かに凌いでいた。

この江戸期の大坂とポンペイを比較してみたい。まず、都市経営の意味では、大坂では、町人による橋の工事や訴訟の調停など町人には、一定の自治はあったものの、基本的には幕藩体制下奉行所を通じて、「地子金の徴収」、「御用金の無心」、「お触れ」という形での各種の通達で締め付けられ、肝心なところでは幕府に支配されており、基本的には上意下達であった。ポンペイでは奴隷制という立場があったものの、都市の「政」は選挙制も存在し、大坂より市民が前面に出ている。

市民生活についてみると、芸能・文化の面では、元禄期の大坂では、文楽・歌舞伎・地芝居などの演劇、地唄、浄瑠璃（常磐津・清元・長唄）唄が盛で、プロだけでなく一般市民も大勢参加し、楽しんでいた。とりわけ豪商達はもてなしのマナーとしても、これらの芸能を身につけるこ

とが求められ、これらの芸能のパトロン的な役割を果たしていた。

大坂はスポーツ観戦としては「相撲」がある。ただ、闘技場での剣士同士の一騎打ち、ライオンと家禽戦に比べると残虐性・エキサイティング性についてはポンペイのアンフィシアター方が上であろう。賭博については、公的には御法度であったが、しばしば豪商の家訓に「博打は禁止」の言葉が出てくるところからみると「闇」で行われていたみるべきである。

風呂については、ポンペイのローマ風呂に比べると、「市民ふれあいの場」としては共通するところがあるが、大坂は、湯の種類が温湯のみであったこと、風呂屋でお茶菓子を食べてふれあいの場はあったものの、風呂に附設する施設として、エステサロン・マッサージ・フィットネス・プール・図書館といったものが大坂にはなかった点を考慮すると、ポンペイの方が優位といえるか。

図 14　浮世絵図
白倉敬彦『喜多川歌麿』より転写

大坂の町家は木造で、災害、とりわけ火災には悩まされていた（享保 12 年、天保 8 年を始め、しばしば大火災に見舞われている）。町家の地割は短冊形で、母屋と離れの間には「庭」があり、松・百日紅などの木、花々が植えられ、池、石灯籠など自然を取り込んでいた。

絵画・彫刻については、大坂の浮世絵や春画はポンペイのそれと対峙できが、彫刻は寺社の宗教的なものに限られており、人間表現という点では酷似するところもあるが、ポンペイの方がそのレパートリーが広い（図 14）。

大阪の学問・教育のレベルの高さは当時のヨーロッパの水準と引けはとらない。

グルメは大坂の味はポンペイのスープより味が一段と「クール」と考えられる。大坂は近在の野菜・近海の新鮮な多種の魚系統の料理に対してポンペイも地中海の魚介類、牛・豚・鶏のほか羊・駱駝・キリンと豊富な肉系統の料理が作られ、総合的には甲乙つけがたい。以上のように、江戸期の大坂の町のセンスはポンペイに酷似している。

3）明治～第二次大戦

1868 年の明治維新後、大阪は、蔵屋敷の廃止、御用金の徴収に痛めつけられ、そのダメージはきわめて大きく大阪経済は疲弊した。しかし、意外と大坂の潜在的「富」は絶大なものであった。富国強兵の下、大阪の経済は不死鳥のように復活した。綿紡績を軸に、工業生産が伸び、明治末には阪神工業地帯での工業生産高は京浜の 2 倍以上も挙げている。交易額も阪神が日本の貿易相手国の中心がアジア大陸にあり、外国との取引へのアクセス面での優位性があり、大きく京浜を引き離した。

この傾向は昭和 10 年代前半まで続き、経済は大阪、政治は東京の様相を呈していた。1885 年に全国初の私鉄（阪堺鉄道）も開通した。また、1910（明治 43）年には小林一三が箕面有馬鉄

表 1　工業生産額の地域的分布の変化

(単位：%)

工業地域	1909年	1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年
A．京浜工業地帯	14.9	19.2	18.5	26.6	19.2	24.7	22.2
B．阪神工業地帯	30.0	28.7	27.0	22.2	20.5	20.9	17.7
C．中京工業地帯	6.9	6.3	7.5	7.3	7.2	9.1	.2
D．北九州工業地帯	3.0	3.7	4.0	8	5.7	4.1	2.7
E．周辺地域	24.5	23.1	22.0	19.2	27	25.5	32.8
F．太平洋ベルト地帯 (A+B+C+D+E)	79.3	81.0	79.0	83.3	79.6	84.3	84.6
G．外縁地域	20.7	19.0	21.0	16.7	20.4	15.7	15.4
合　　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：Aは東京都・神奈川県，Bは大阪府・兵庫県，Cは愛知県，Dは福岡県の統計数値，Fは茨城から長崎に至る23都府県，Gはその他の23道県。沖縄県は資料不明により除外。

資料：通産省『工業統計50年史』ほか

道（現阪急）を開通、沿線の住宅開発の嚆矢となった。小林はターミナルデパートも先駆けて創設した。

1901 年には全国初の公立（大阪市立）による高商（前年に政府が当然商都大阪に高商を建てると踏んでいたのに神戸に高商を設立したことに怒りをぶつけた）を立ち上げた。1903 年には大阪市は内国勧業の開催（1912 年に新世界にルナパーク、通天閣をつくっている）をやり遂げ、大阪の経済力を内外に大きくアッピールした（表Ⅰ）。

芸能・文化では、大阪では道頓堀界隈に文楽・歌舞伎の座があり、元禄期以来、上方文化のクオーターとして大いに賑わった。明治に入って、浪曲（浪速節）が風靡し出し、ラジオの普及とともになにわから全国へ拡がりを見せた。大正の末期には、吉本せいが桂春団治を招き入れ、吉本興業を立ち上げ、「笑都」大阪を全国に売り出した。

ポンペイとの対比をみると、1890（明治 23）年にようやく選挙制度が導入されたものの、選挙権は僅か 1% の冨優な有力者に限られていた。1925（大正）14 年になってやっと成人男子のみに選挙権が与えられた。（1945 年に成人女子に選挙権）この点では、ポンペイの方が先行していた。

芸能・文化は江戸期と同様に文楽・歌舞伎・能・地唄・日本舞踊などは有力商人に支えられながら、道頓堀界隈を中心に賑っていた。芸能の部門に「映画」が登場した。1896 年神戸にキネスコープ『活動写真』が入ったのを皮切りに、忽ち、映画館ができ、その料金が比較的安く、庶民に広まった。

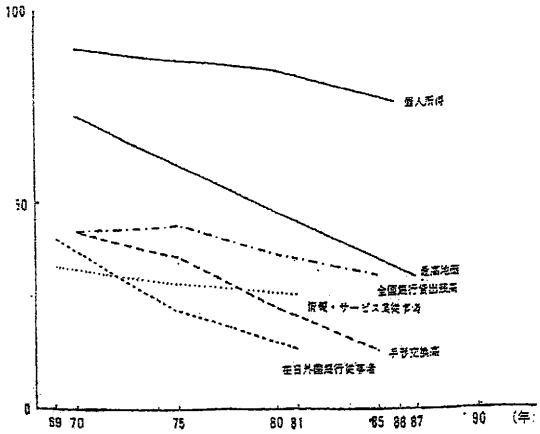
食は江戸期と同じく、大阪湾は「魚庭」とも称されるとおり、新鮮で美味しい魚が近海魚を軸に沢山、漁獲られ、食い倒れの大阪は依然として健在であった。

4）第二次大戦後の大阪

第二次大戦の敗戦後、空襲で壊滅的打撃を受けた大阪であったが、逞しく復興した。高度経済

成長期の1970年までは、大阪の工業力の強さを背景に、経済的には、日本は「二眼レフ」構造といわれるくらい大阪の経済力は強かった。

しかし、1970年代を過ぎて、日本経済の主軸が「工業」から「情報・金融・サービス」へと移行した。こうなると東京が首都（中央官庁街）という強みがあるうえ、情報の創造・発信の源たる大学・研究所が圧倒的に多く存在し、テレビのキー局・大新聞の本社がすべて東京に集まっていたことから、情報発信力（東京が87%、大阪9%）の強い東京が圧倒倒的に優位に立った。このことが、大阪から本社・金融など中枢管理機能を大量に東京へと移転させることを招いた。1960年代半からの高速道路・新幹線網が急速な発展も、そのネットワークの中心が「東京」に置かれており、これらの「高速網」が発展すればするほど、大阪は、ますます、地位を落とし、東京一極集中が大きく進行した。一人当たりの県民所得も、1970年時には東京10対大阪9と拮抗していたが、2012年には東京10対大阪7、全国順位も大阪は12位に落ち、それとともに、大阪の経済力に支えられた上方文化も、また、その繁栄の象徴たる道頓堀での演劇場も1990年には、5座のうち4座も消滅してしまった。大阪を代表する文筆家も谷崎潤一郎、織田作之助、藤沢桓夫などキラ星の如く輩出したが、1990年代後半以降は有力な作家は出てこなくなった（図15）[5]。



（地価公示、日本国勢図解、事業所統計）

大阪の地盤沈下

図15　70年代以降の東京と大阪の経済指標の比較
著者作成

今日の大阪をポンペイと比べてみると、車・テレビ・コンピューター・スマホ優れた医療技術など物質的な豊かさは比較しようもないが、以下のように、見方によっては、現在の大阪の市民生活がポンペイと比べて本当に「豊か」なのか疑問が出てくる。

① 「政」への市民参加についていえば、民主主義の真骨頂・投票権の行使さえ50%を大きく切る場合が多い。例えば、平成元年以降の大阪市長選挙の投票率は33%。コミュニティレベルの町内会への参画に至っては、回覧板を回すのがやっとという町会がほとんどで、住民集会が持たれている町会はほとんど無い。

② 芸能・文化については、道頓堀の芸能センターから「芝居小屋」が消え失せたことに象徴される。世界文化遺産の指定を受けており、大阪市民の芸能・文化の「宝」とも称すべき「文楽」「歌舞伎」「能・狂言」などを日常的に楽しんでいる市民は、1%にも満たない。それほど劇場まで足を運ぶ市民は少ない。

「スポーツ」についてはプロ野球・サッカー・ラグビー・バスケットボールなどには、そこそこ（市民当たり20～30%程度が観戦）が出かけているが、プレーを常時楽しむとなると極めて少ない。

③「食」は「食い倒れ」に象徴される大阪であるが、グルメの主役の「魚」については大阪近海での沿岸漁が衰えたうえ、一般市民にとっては魚の料理のアドバイザーたる鮮魚商の数も大幅に減少し、スーパーやデパートの鮮魚コーナーに並ぶ魚は、刺身・切り身が主体で、形の見える魚は大きく減った。しかも、その大半は、防腐剤まみれの「養殖魚」であり、安くて旨い雑魚類は姿を消してしまった。この背景には、「包丁」を使って魚がさばける市民が減少した（4 世帯に 1 世帯は包丁がない）ことも大きい。

また、大阪が世界に誇る「だし」（昆布・鰹節）も化学調味料に頼る傾向がある。野菜も、無農薬の野菜が少なく（無農薬と農薬まみれの野菜を比較すると、後者はビタミン・鉄分は 5 分の 1 以下）甘さよりエゴさが残る野菜になってきており、誇るべき大坂の「味」は消えてしまったのか。この状況からすると大阪の「食い倒れ文化」が危ない。ポンペイにグルメ部門で劣る可能性が強くなってきた。

5）大阪のまちづくりへの提言

凋落してきた大阪の町を魅力的な町にできるのか。**「ポンペイの町の」精神**をヒントに以下大阪の街づくりを提言する。

1）都市の価値・風格は、文化・芸術・芸能の「心の豊かさが物をいう。従って、大阪の発展の基軸を「経済」から「文化・学術」に転換する。

2）そのために、学校教育に「文化」の時間を組み込み、幼少期から「伝統文化」に親しませよう。大阪の誇る「食文化」の伝統を浸透させるために、「調理」もカリキュラムに組み込み、本物の食文化の復興を図ろう。

日本の芸能は、東西文化の融合の産物。世界レベルの演劇・樂劇・舞踊フェスティバルを開催しよう。

芸能も観光の復興に位置づけよう。文楽・歌舞伎・能・狂言・浪曲など毎日鑑賞・実演できるシステムづくりを。そのために現在の 2 倍以上のプロ芸能人を養成しよう。

3）大阪市は大学の数も少なく政令指定都市の中で大学生の比率が最低となっている。この大学不足を解消するために、大学の誘致のほか、市民学習センターをコミュニティカレッジに格上げし、市民のアカデミック・カルチャーレベルを上げよう。智の最高施設・国立国会図書館関西分館（場所が極めて不便で利用価値がない）を大阪駅の北ヤードの空き地に誘致しよう。

大阪は学力スト・体力テストともに全国で最下位にグループになっている。ポンペイでは、ギリシャ以来、体育・音楽・文学・哲学（真・善・美）に力を入れており、その教育精神を学びたい。

4）大阪の住宅の質のレベルは全国でも最悪のレベル。ポンペイでの死者はその原因のほとんどが噴火の有毒ガスによる死で、建物崩壊による圧死はほとんどない。それほど住宅は堅固に創られていた。それに対して、大阪には木造の住宅が多く、密集住宅街が多い。大阪は平均寿命も全国最下位グループになっている。これ原因は、住宅の質の悪さにも大きな要因がある（日本住宅学会では住宅の質の劣位悪さと有病率の相間の高さを指摘している）。公営住

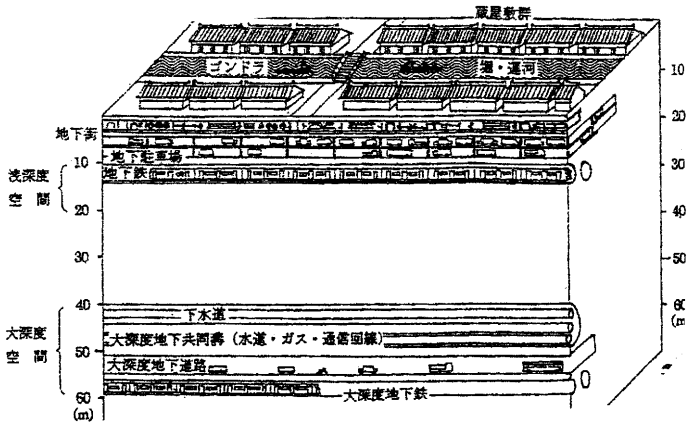


図 16　大坂都市部における大深深度利用と景観創造
（實清隆私案）

宅の応募倍率も全国で最悪の 30.5 倍にも（大阪の最低水準世帯 7%、準最低水準 34%）。貧困者の住宅対策が鍵になる。

5）大阪の景観を魅力的にイメージアップする。

大阪の良さは、「水」。川と旧運河の周辺には蔵屋敷跡や名勝建築物がある。

① 道頓堀の浄化：安心して飛び込めるぐらいの奇麗な川に。都心部のうねうねした見苦しい高速道路を地下へ。

② 大川・運河畔には桜並木を設け、東洋のベニスにふさわしくゴンドラを浮かべよう。

③ ホログラフィーを使って蔵屋敷の景観復元、それが出来ない場所では、デジタル復元景観のグラスを装着して観光ウォークを（図 16）。

註

1）ナイジェルススパイヴィー・マイケルスクワイア（2007）『ギリシア・ローマ文化誌百科』小林雅夫・松原俊文訳、原書房、23-26 頁

2）R リング（2007）『ポンペイの歴史と社会』堀賀貴訳、同成社、135-142 頁

3）弓削達（1987）『ポンペイ奇跡の町』創元社、112-115 頁

4）R リング（2007）同掲、57-60 頁

5）弓削達（1987）同掲、131-139 頁

主な参考文献

1）柴田徳衛（1967）『現代都市論』東大出版会

2）アルベルト・カルロ・カルピチェーチ（1991）『ポンペイ』ボネキ・観光出版

3）ロベール・エティエンヌ（1987）『ポンペイ奇跡の町』（弓削達訳）創元社

4）金子史朗（2001）『ポンペイの滅んだ日』東洋書林

5）青柳正規（2001）『ポンペイに学べ』朝日出版

6）ロバート・クナップ『古代ローマの庶民たち』増永・山下訳、白水社

７）木村淳二（2004）『優雅でみだらなポンペイ』講談社
８）大阪市史編纂所（1988～1996）『新修大阪市史』第 1 巻～10 巻、大阪市史編纂所
９）大阪市都市工学情報センター（1999）『大阪千年都市－まちづくり物語－』
10）大阪市史編纂所（1999『大阪市の歴史』
11）大阪市史編纂所（2000）『大阪の歴史力』
12）實清隆（2003）『都市計画へのアプローチ－市民が主役のまちづくり－』古今書院
13）R. リング『ポンペイの歴史と社会』堀賀貴訳、同成社

結語

ポンペイはギリシャの植民都市として発生し、BC 80 年にはローマの拡張の前に組み入れられ、以後はローマの保養都市として発展する。AD 79 年のヴェスビオス火山の噴火により、火山灰により埋没したが、これが「タイムカプセル」として活きている。ポンペイには、古代のギリシャ文化とローマの文化が取り組まれており、ギリシャの直接民主制、芸術・芸能、ローマの実用的技術・建物・施設（道路・水道・下水）・人間味豊かな生活（ローマ風呂・闘技場）があいまって、都市生活からみると、一種の「桃源郷」のような魅力的都市になっていた。

日本の都市では、ポンペイのセンスに近のが、江戸時代の「大坂」である。大坂は、江戸期にはその水運を活かして、「天下の台所」として繁栄した。そのもとで、上方文化（文楽、歌舞伎など）の芸能がもてはやされた。食い倒れの食文化も育まれた。北前船による北海道からの昆布、土佐の鰹節が世界最高の「出汁」が世界最高の料理を創った。人間味豊かな美も、熱狂的スポーツ観戦・相撲などもあった。

大阪は明治期に入って、一時経済は弱ったものの、アジアに近い優位性で、盛り返し、芸能では、浪曲（浪速節）・漫才なども加わりその勢いは衰えることはなかった。

しかし、第二次大戦後、高度経済成長期が過ぎるころから、日本経済の流れが変わり、情報・サービス・金融・ハイテクの方向へとシフトし、東京の一極集中が進む一方、大阪経済は凋落へと向かった。それが、芸能・文化にも現れ、世界遺産にも指定されるほど重宝な文楽や歌舞伎も人気が落ちた。食い倒れ文化も、大阪湾の近海漁業の衰退もあり、魚文化の伝承者たる「鮮魚店」も激減し、スーパー・デパートに並ぶ魚も刺身切り身が中心で、それも防腐剤まみれの養殖魚が多く、安くて旨い雑魚は姿を消した。出汁も化学調味料が席捲している。食い倒れ文化は大ピンチを迎えている。こういった状況を変えるには、ポンペイの「都市の精神」が参考になる。大阪は、「そのポンペイの心」を活かし「人間味の溢れた感動的な都市生活」、「ゆとろぎのある都市生活」、住民参加の下、芸能・美術・体育・グルメ文化の香りが高い都市の街づくりを考えたい。

Summary

The construction of Pompeii was launched as early as the 6th Century BC as a colonial city of the Greek people. In 89 BC it was amalgamated by the Roman Empire. Therefore it has two cultural characters : the Greek and Roman. The Greek traits is found in democratic political system, advanced dramas and music and high philosophical thoughts while the Roman boasts of an advanced infrastructure including the construction of waterways, drainage systems, roman public baths and an amphitheater.

In 79 AD there broke out a fierce volcanic eruption of Mt. Vesuvus covering the city with dense volcanic ashes, so that the city was completely well preserved untill the 18th century as a capsule.

The author tried to make comparison of Osaka from the view point of town management.

At the time of Edo, Osaka boasted its economical prosperity. The autonomy of Osaka municipality was highly endorsed. Citizens of Osaka particularly among merchants enjoyed music and drama. The cuisine of Osaka gained an extremely high reputation.

Today Osaka confronts such serious problems as retreat of traditional entertainment, reduced popularity of the lost flavor of its cuisines so called ‘kuidaore’ and etc. Pompeii provides ideas about how to improve the situation and how to create an enjoyable and stimulating urban life.

【Key words】 Pompeii, Naniwa, Osaka, management of city